

ノイエスだより

ノイエス朝日(朝日印刷工業株式会社)

群馬県前橋市元総社町七三―五

TEL 027・2555・3434

FAX 027・2555・3435

http://www.neues-asahi.jp

先日、ノイエスで開催していた「ふる本市」で購入した「娶らざる詩人 大手拓次の生涯」(生方たつる)を読んでいて久しぶりに詩の世界に引きずり込まれる衝動に駆られました。詩「香料の顔寄せ」は特に印象深く、それぞれの香りのイメージが独特な世界観を作り出して大手拓次という詩人の特異性を際立たせています。

また、「アウトローと呼ばれた画家 評伝 長谷川利行」も、その折に求めたものです。長谷川利行の作品は時々観る機会がありました。大手拓次は、一八八七年生まれ。長谷川利行は一八九一年生まれです。同時代を生きた詩人と画家です。

長野の梅野記念絵画館で先日まで開催していた村上肥出夫の展覧会で観た作品は、厚塗りの絵具から溢れるような汗や涙が滲み出て、さらに歓喜が溢れてくるような作品の数々でした。

活字の持つ力、そしてキャンバスから伝わってくる感動とは、いったい何でしょうか。それは作品がもつ力、すなわち書き手である詩人、画家のもつ世界観の表現の結実したものであると言えらると思います。

作家の生きざまは、その作家が生きぬいた時代背景が色濃く見え隠れしてきますが、客観的に読んだり観たりする部分では非常に魅力的で、楽しませてくれます。

大手拓次と萩原朔太郎や北原白秋との関係。長谷川利行と歌人や多くの画家との関係もまた人間的な結びつきがあり、痛みを伴いながらも心温まる話も残されています。

人はいつの時代でも本質的に変わることのない骨格がしっかりと通っているものだと感じます。変化の激しい社会情勢の中で翻弄されることなく一歩一歩を自分の足で歩む事を意識していきたいと思えます。

昨日、NHKのETV特集アンコール放送で「生き抜くという旗印 筋ジストロフィーの詩人 岩崎 航の日々」を見ました。ベットで人工呼吸器で命を維持している詩人の日々の映像です。

「航の SKY NOTE」の公式ブログで作品も読めます。「点滴ポール 生き抜くという旗印」「日付の大きいカレンダー」の書籍もあります。機会があったら是非手にとってみて下さい。

映像からの影響力は、テレビっ子時代といわれた昭和に育った者にとっては生活の一部となっていて、山椒の実の枝取りなどしながら録画した番組を時間をかけてゆっくりと鑑賞しています。「ながら族」とも言われた私の年齢にとって、二つの事を同時に出来るのは時代の産物なのかも知れません。

(武藤)

ノイエス朝日(展覧会)のご案内

異なる製法による

ガラス二人展

高橋 明 (手伸ばし 遠心法)

木村 明 (吹きガラス)

会期 七月二日(土)～十日(日)

午前十時～午後五時三十分

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

ガラスの歴史は古く紀元前三〇〇〇年頃とされています。紀元前一世紀にはフェニキアのガラス職人によって吹きガラス製法が開発され、その後多くの職人により薄く透明感のあるガラス製法が生み出されました。

今回は、ノイエスで定期的に個展を開催しています木村明氏と上越クリスタルで作品づくりをしている高橋明氏による二人の異なる製法によるガラス展です。夏の暑さを吹き飛ばすような清涼感のあるガラス作品を是非ご高覧いただければと思います。



〈企画〉

こころみの

土田好江・豊田共子・福島祐子

坂本 敏・吉田章二

〈企画〉

会期 七月十六日(土)～二十四日(日)

午前十時～午後五時三十分(最終日は五時)

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

初のこころみ五人の作家によるノイエスでの展覧会です。

絵画・染織、皮革それぞれの作家の表現による個性と、新しい視点での作品展示を楽しめます。是非、お出かけ下さい。

〈県内のお知らせ〉

第二十三回朗読公演+ギター・マンドリンの調べ

「倚りかからず」

詩人 茨木のり子

音楽/黄敬(ギター)

濱野高行(マンドリン)

日時 七月二十四日(日) 午後一時三十分開演

会場 煥乎堂五階ホール

入場料 一般/前売二五〇〇円 当日三〇〇〇円

学生/前売・当日一〇〇〇円

煥乎堂 027・235・8111

主催/前橋朗読研究会「BREATH」



二〇〇六年に七十九歳で自宅で急死した詩人、茨木のり子の「倚りかからず」を五人により朗読。

企画・構成・演出・司会は遠藤敦司氏による。

ノイエスの「ふる本」のコーナーに何かの折にどこかでもらってきた茨木のり子のポートレートが飾ってあります。

考えてみたら世田谷文学館のパンフレットだった・・・と。

一九五三年に詩人の川崎洋と同人誌「權」を創刊。

詩作に対する考え方の違いはあったものの茨木のり子が当時、多くの詩が一つの語感では書かれていないという疑惑と不満があり、そこで川崎洋とならと、二人で始めたとか・・・その後「權」に参加していく詩人達。

一人一人が完全に独立した、抒情性や感受性を指摘しつつ、社会と向き合う姿勢は二十代から変わることなく亡くなるまで揺るぎがなかったようです。自宅で急逝している詩人を発見した親戚は、そこに「私の意志で、葬儀・お別れ会は何もいたしません。この家も自分の間、無人となりませぬゆえ、弔慰の品はお花を含め、一切お送り下されませぬように、返送の無礼を重ねるだけと存じますので、あの人逝ったか」と一瞬、たったの一瞬思い出してくださればそれで十分でございます」と遺書があったそうです。